

2023年度 年主題「ともにつむぎだす～希望の中で～」

0・1・2歳児 1月主題 「いっしょに」

月のねがい

- ◎神さまに守られていることを感じる。
- ◎友だちや保育者と一緒にいることを喜び、関わりあう。
- ◎自分でやってみようとするが増える。
- ◎友だちの真似をしたりされたりして遊ぶ楽しさを感じる。
- ◎冬の自然の中で身体を動かす楽しさを感じる。

3・4・5歳児 1月主題 「やってみよう」

月のねがい

- ◎クリスマスにお生まれになったイエスさまに親しむ。
- ◎友だちや保育者に自分の思いを言葉で表現し、お互いに聞きあう。
- ◎伝承遊びやお正月の遊びにも関心をもち、新しい遊びをじっくり見たり、取り組んだりする。
- ◎冬の冷たさを身体で感じ、不思議さや面白さを伝えあい、調べたり試したりする。



今月の聖句

「神よ私たちは感謝します。」

詩篇 75:1

新年、あけましておめでとうございます。

竹内まりやさんの歌に「人生の扉」という作品があります。人は皆、成長と共に年を取っていく。経験を経て、物の見方も変わっていく。50歳を迎えた頃の竹内まりやさんが、ご自身の経験を踏まえて、人生の節目を見つめながら作られた歌です。繰り返しのところに、次のような歌詞が出てきます。「20代は楽しいと私は言う。30代は素晴らしいとあなたたちが言う。40代は愛らしいと人々は言う。けれども、50代もまだ捨てたもんじゃないと私は思う。60代もいよいよと私は言う。70代は大丈夫だとあなたたちが言う。80代でもまだ元気だと人々は言う。けれども、私は90代まで生きると思う。弱るのは悲しいと私は言う。歳を取るの辛いことだとあなたたちが言う。人生になど意味はないと彼らは言う。けれども、私はそれでも生きる価値はあると思う」(原作は英文)。そのように生きることの素晴らしさ、歳を取り成長する中に意味を見出そうとする人生の応援歌です。確かに、生きる上で人生は決して楽しいこと、嬉しいことだけでなく、辛いこと、悲しいことも起ります。しかし、それでもそこに生きる意味を見出すこと、それは神さまから私たちに与えられている尊い賜物であると思います。「神よ私たちは感謝します」という詩篇の言葉は、きっとそのような背景から生まれたのだと思います。

2024年という新しい一年が、園に通う子どもたち、その保護者、保育者をはじめとする関係者お一人おひとりにとって、実り多き、祝福に満ちたもの、感謝に溢れた日々でありますように！

協力牧師 池田基宣

2・3号認定児
新規入園申込受付期間
1/15(月)～31(水)
定員に限りがあります。お早めに
市福祉事務所へお申込み下さい！
必要書類は園にもございます。



1月の行事予定

6日(土)	父母の会役員会
9日(火)	始園式(1号午前保育)
23日(火)	おゆうぎ会予行練習 弁当日

2月の行事予定

3日(土)	おゆうぎ会
5日(月)	振替休日(1号)
6日(火)	卒園記念写真撮影
7日(水)	誕生会(2才以上2・3月生)
14日(水)	参観日(5才児クラス)
15日(木)	参観日(4才児クラス)
16日(金)	参観日(3才児クラス)
21日(水)	お別れ遠足
24日(土)	めぐみ誕生会(1～3月生)

新年あけましておめでとうございます。
年末年始、皆さんはいかがお過ごしでしたでしょうか。いよいよ3学期がスタートですね！最後の大きな行事や進級・進学にむけて準備のときです。保護者の皆さんと子どもたちの成長を共に喜び合いたいと思っています。
今、保育者たちの気持ちはおゆうぎ会に向かい始め、12月にあったクリスマス会がずいぶん前のことのように感じています。しかし、今でも聖劇の歌やセリフを口ずさんでいる子どもたちの姿が見られます。特に、聖劇には参加していませんが、いちばん近くでおけいこを見ていた3才児の姿が多いような気がします。トイレに行く階段で、外遊びで、手を洗いながら1人で、友だちと…。それがとっても楽しそうです！これがだんだんおゆうぎ会の曲や劇に変わっていくのかなと楽しみにになりました。
おゆうぎ会では、普段はあまりしないような難しい動きを覚えたり、友だちと合わせて表現することにチャレンジしていきます。おゆうぎや劇を楽しむだけでなく、「ちよっと難しいけど、やってみよう！」「やってみよう」など子どもたちの気持ちを引き出しながら、みんなで楽しんでいけたらと思います。
冬休みが明け、子どもたちは「〇〇君来てる？」「休んだとき何した？」「いとこと遊んでた」などなど友だちや保育者と冬休みの話を一通り済ませます。そして、「なわとびしよう」「鬼ごっこがいいよ」「山作ろう！」と、園庭やわかさ公園で元気いっぱい遊んでいます。新年が始まり、大きな地震や飛行機事故のニュースを目にしました。自分たちにいつもと変わらない日常があることに感謝しながら、地震や事故に遭われた方のためにお祈りしながら、なにが自分たちに出来るかを共に考えていけたらと思います。
3学期は1年で締め、大きな行事もあります。3学期もどうぞよろしくお祈りいたします。
主任 冷水



当たり前から感謝へ

「なんで叩いてしまうの？」
子どものトラブル

小さな社会である園生活において、子どものトラブルは日々絶えません。友だちを叩いてしまう。物の取り合いや場所の取り合いなど、よくあることです。保育者はその度に「どうしたの？」と様子を伺い、子どもが「こんなこんなして…」と言う話しを汲み取って「じゃあ、貸してって言うてみようか」とか「どいてって言うてみようか」と声かけをし、解決する場合もあります。

しかし、子どもの感覚の受け取り方が過敏だったりすると、人が近づいてきたことが怖くて急に叩いてしまったり、自分のエリア(心地よい場所)に人が入ってきただけで「嫌だ！」という感覚になり、自分を守るためにぶっつけてしまったり、感覚を過敏に感じる子はビックリして同じようにたたき返してしまうとか、力加減がわからない子は「このくらい痛くないだろう」と強く叩いてしまったりする。他にも、感覚を追求したい子どもは「叩いたらどうなるんだろう」という思いで叩いてしまったり…と様々です。そのような感覚の中で生きている子どもがいます。では、どうやって関わると感覚が繋がっていくのかを考えてみます。

感覚を子どもの中で統合していくために行う
皮膚刺激の遊び

- ・子どもを膝にのせ、歌やわらべ歌などを歌いながら体を揺らしてみる。
 - ・風呂に入るとき体の部位を言葉で言いながら洗う(「手を洗うね」と言ってから洗うと言葉と体験を一致させてあげられる)
 - ・触るときもちょっと圧をかけてぎゅっぎゅっ触ったり、ちょこちょこたたいたり、優しいさわわり方で、「優しく触って気持ちがいいね」と話しながらやってみると繋がりがやすい。
 - ・背中や足の裏に触れて遊ぶ。子どもは「そんな場所があったんだ！」といつとも手の届かない体の部位の感覚が入ってくる。
- それらの遊びを何回も繰り返して積んでいく。感覚を追求するという行動は自分が納得するまでやってしまうので、地道にやっていく事が大事です。毎日の少しずつで変化も少しずつ見えてきます。大人が、子どもとその体とコミュニケーションを楽しみながら触れ合うことで、子どもの感覚が繋がっていきます。是非、試してみてください。
園長 園師

新年明けましておめでとうございます。皆様ご健勝の内に、二〇二四年(令和六年)をお迎えになられたことと存じます。本年も、皆様にとつて希望に満ちた素晴らしい年でありますよう心からお祈りいたします。昨今の素晴らしいまだまだ自粛生活を強いられておりましたが、ほぼコロナ禍以前の生活に戻ったのではと実感しています。とは言え、コロナ禍で被災したあらゆる損害や痛みが未だ癒えない方たちのことも、心に留めつつ過ごしていきたいと思えます。

そんな中、衝撃を受けたのは能登半島地震です。一年の計に希望の思いを馳せる元旦に起こってしまい、甚大な被害と多くの犠牲者が出てしまったことに言葉が失ってしまいました。現在でも二百人を超す方が安否不明とか。地震発生から刻々と時間が過ぎていきます。日ごとに犠牲者の数が増える中、一時も早い救出を心から願わずにはいられません。繰り返される自然災害に触れる度に、犠牲になられた方への哀悼の思いと共に、いつも二つのことを考えさせられます。それは、「分かち合うことの大切さ」と「守られていることへの感謝」です。両方とも分かっているつもりでも、日常生活の繰り返しの中で薄らいでしまうものではないでしょうか。大谷翔平選手を始め、多くの著名人が早々と金銭的な支援を表明されています。今回の震災も決して対岸の火事などではなく、まもなく明日は我が身のこと。いつか必ず起こることが、今回は種子島ではなく能登半島沖であったということだけですが、自分のこととして捉え、言葉にならないほどの艱難辛苦の中なる方々に、心を寄せていきたいと思えます。

園の礼拝です話の一つに、「ありがたの反対はあたりまえ」があります。子どもたちに「ありがたの反対は何？」と問うと、必ず「ありがたの反対は嫌い」と答えます。私たちは、今ある暮らしがずっと続くのだと錯覚してしまいがちです。淡々と進む繰り返しの中で、漠然と過ごす日々があたりまえであると思ってしまうのではないでしょうか。でも、考えてみれば、当たり前でどこにもないものです。日々の糧があること。健康であること。家族がいること。収入があること。友人がいること。そして平和に暮らせること。これらが与えられていることは当然のことではないことを忘れてしまっています。ありふれた日常こそが特別であり、奇跡そのものなのです。私たちは失ってしまふまで、そのありがたみに気がつかないのです。生かされていることに感謝し、足るを知る生活を送りたいものです。

「焚くほどは風がもてる落ち葉かな」良寛さんが藩主に新しく建てる寺の住職を依頼された時に書いた句です。「風が吹いてくれれば、今日を生きてる米を炊くための燃料(杉の葉)は与えられるので、今の生活で満足しています。」まさに知足の極み。

来週の土曜日は、恒例の熊毛地区私立幼稚園教師研修会でした。残念ながら二月に延期になってしまいました。来年度は研究テーマが変わる年で、本園が発表の担当になりました。土曜日利用の皆さんには大変ご迷惑をお掛けしますが、ご理解を戴きますようお願いいたします。

三学期は、年長児にとつても園生活最後の学期です。幼児教育の仕上げの時でもあります。それぞれの子どもたちにとって、思い出深い魅力いっぱいの日々になるよう努めてまいります。本園も宜しくお祈りいたします。

学園長

毎月お読みください

毎月お読みください